

# 大きな世界を変えるのは 一人の小さな動きから

「一台のリヤカーが立ち向かう」より

中学生の頃に歌っていた反戦や差別反対の歌が今の時代に合うようになってきたという

## 中川五郎さん



フォークソングを歌い始めて50年になるという中川五郎さんには、実は40年以上前、本誌第一期のときにもお話を伺ったことがある。「フォークリポートわいせつ裁判」といって彼が書いた小説がわいせつだということと起訴・裁判になった時のことだ。その頃から歌うのと書くのと両方をやってきた中川さんだが、さいきんまた歌に力を入れてるそうで、1月には2枚組のアルバムを出した。その中には社会問題を題材にした歌が半分は入っていて、ライブと同様、彼の熱い想いが伝わってくる。この日は歌い始めた頃の事から始まって、一時期歌わなかった頃のこと、そしていま現在のこと、またボブ・ディランのことや歌づくりの姿勢なども聞かせてもらった。

(あ)

—— まずはプロフィールを教えてください。

自分ではフォーク歌手というかフォークシンガーだと名乗りたいんです。高校生の頃から人前で歌い始めて、それを今でも50年続けているわけですけど、その過程の中であまり歌が書けなかったり、あるいは歌う場所がなくなったりとかいろいろ状況があって、音楽についての文章を書き始めたり、アメリカやイギリスのミュージシャンの歌詞の対訳をやったりしているうちに音楽を離れた原稿の依頼なんかも来るようになって、エッセイや小説まがいのことを書いたり、小説の翻訳なんかもやりたくて10冊以上手がけたりしたんですけど、ただ僕の中で基本的には歌をつくって歌うというのがメインに貫いてあって、すべてそれにつながりがあるような形でやっているんですよね。

—— 前から謎に思ってたんですが、ボブ・ディランの全ての詩を訳した本を出したりというのは、もともと例えば帰国子女だったり、あるいは大学で英文学をやったというようなことなんですか？

いや、僕はぜんぜんそういうことはなくて、一言で言っちゃえば中学生くらいにアメリカのフォークソングとかカントリー&ウエスタンとか、そういうアメリカの歌が好き

になって、そのうちボブ・ディランが登場してきて、その詩もものすごく面白くて、どういことを歌ってるんだらうってすごく興味を持って、辞書をひいて一生懸命調べて自分なりに訳すことで英語の勉強をしたんです。だから好きだから興味あるし辞書ひいたりするのも苦じゃなかったんで、歌を通して英語を勉強したってことです。

—— そうなんですか。でもボブ・ディランの詩なんて難しいと言われてますよね？

最初のころはぜんぜんシンプルでしたね。「ブロード・オン・ブロード」とか60年代半ばになってからは、けっこう何言ってるのかわからないようなことになっていったんですけど、最初のころはすごくわかりやすいし、ボブ・ディランの詩自体はフォークというか伝誦歌のスタイルをふまえて、その替え歌というかパリエーションで作ってるものが多かったから、むしろビートルズの詩なんか以上にわかりやすかったんです。だから僕みたいな中学生でも辞書をひいてやっていけばわかるようなかんじはありました。

—— それを聞いて勇気づけられる人も多いかもしれませんね。(笑)

やっぱり何十年も好きで、それに向き合っ

てきたというか持続したことでわかるようになっていったし、20才すぎて歌詞の訳とかレコードについての対訳なんかやったんですけど、今見ると恥ずかしい限りです。ぜんぜんわかってなかったというのか。でも10年20年と続けてるうちに訳し方とかいろいろ知識も身についたわけです。それに僕は中学生くらいからギターをもって歌うことにものすごく興味を持ってたんですが、それと並行して本を読むこととか文章を書くことが好きだったから、ものすごく自然に原稿を書くとか翻訳することとか、自ら進んでやったところがあるんです。それで高校の頃はいずれはジャーナリストになりたいなんて思っていて、大学は文学部の社会学科の新聞学というのを受けて入ったんです。全然行かなかったんですけどね。(笑)

—— この大学に入ったんですか？

同志社です。その時は鶴見俊輔さんが同志社の新聞学の一番人気教授で、僕は高校の頃からベ平連にすごく共感してたんで、鶴見さんに教えてもらいたいと思って同志社を目指して入ったんですけど、鶴見さんが同志社を辞められて。しかも入っても鶴見さんのゼミとか受けられるのは3年後か4年後ですからね。

— 大学は卒業したんですか？

いや、まったく行かなかったです。最初から。

僕が人前で歌い始めた1967年くらいは、日本でけっこうフォークソングが起こって、特に関西では関西フォークと呼ばれていて、日本語でメッセージ色の強い歌をうたうのが広がり始めた時期だったんです。それまで誰もまだやったことのないようなことをやっていくという面白さがありましたね。

— 最初に歌いはじめたのは？

僕が歌い始めたきっかけは、アメリカのフォークソングの影響をうけてです。一番影響を受けたのはピート・シーガーで、その先輩のウディ・ガスリーとか、その後の世代ではボブ・ディランとか、そういう人たちの歌を聴いて、とにかくもう単純に彼らのやってる音楽を日本語でやりたいという意識だけでやり始めたんです。たまたまその時代が60年代中頃から後半で、アメリカではベトナム戦争反対とか、60年代前半は黒人差別の公民権運動とかが勢いがあって、そういうのと結びついたフォークソングがいっぱいあって、僕の中ではリアルにそういうことをやりたいと思っていて、ほんとに真似ばかりしてやりはじめたんです。高校生になったころです。学校の中で一人でピート・シーガーの歌を日本語にして歌ったりして、で高校2年生から3年生になる1967年の3月に、たまたま高石ともやさんが大阪のペ平連の集いに歌いに来てた時に話しかけたのがきっかけになって、あちこち連れてまわってもらったんです。その年の夏休みに替え歌で「受験生ブルース」というのを作って、それを高石ともやさんが曲を付け替えて歌ってけっこう売れたという話題になったことで、そのおかげで僕もあちこちで歌えるというか、ずーっとやっていけるチャンスももらったのかなと思ってます。

— 新宿西口広場のフォークゲリラにも参加してたそうですね。そのころは東京にいたんですか？

歌い始めた頃は大阪に住んでいて、東京に出てきたのは71年なんですけど、東京に歌いに来た時にたまたま西口集いにも出たことも1回か2回ありましたね。梅田の地下街でフォークゲリラをやっていたのにはよく出てました。

— 歌ってなかった時期があったと聞きますが、それはどういうことで？

71年に東京に引っ越して吉祥寺に住ん



で、ぐわらん洞に入りびたるようになったんですけど、70年代に入るとあんまり政治的な音楽は誰も歌わなくなっちゃって、渡さん（\*高田渡）なんか歌うたは四畳半フォークみたいな呼ばれ方をして、私生活というか生活を歌うようなことに移っていったんです。

60年代後半は熱く盛り上がり世の中変わるぞくらいの実感をもってみんな街頭に出たりしていたし、政治の動きの中で歌をうたおうとしていたんだけど、けっきょく歌の有効性というか力が見つけ出せなかったし、自分がやりたいと思ってたようなストレートにメッセージをぶつけるような、戦争反対だけをわーっと言うような歌っていうのが僕自身も歌えなくなったし、まわりももうそんな歌なんていないよ、まだそんなこと歌ってんのかみたいになっていったんです。

そして70年代に入るとすぐ、暮らしを歌ったり恋を歌ったりするのがフォークだみたいなふうになっていって。僕も70年代に入って何を歌えばいいかわからなくなって、そんなふうに向を見失ったということで音楽の原稿を書いたり、そっちの方に比重が傾いたという面があったんです。

自分も70年代が20代で30になっていく時期に重なっていたから、自分自身も周りの人も子供をつくったり家庭を築いたりして、生活のためにやりたいことをやれなくなって、いろいろ生活を変えらるということに直面していたから、そういう20代のリアルな生活を歌で表現できたらなということを考えて、70年代の中頃から後半にかけてやってたんですけど、あまり受けなくて、60年代にフォークが広がり始めた時は乱暴でもいいし素人でもいいし、ただギター持ってがーがーがーなっても面白いみたいだったのが、けっきょく歌はきれいで整っててうまいのがいいよねみたいな、もともと自分たちが壊そうとしたような既成の流行歌というかアマチュアっぽい手作り感満載の歌はみんな聞かなくなったんです。

— ニューミュージックというのが流行りましたね。

はい、そういう呼び名のもに移っちゃって。それで、僕は80年代の10年間はほとんど歌えなくて、音楽の原稿を書いたり雑誌の編集を手伝ったりとか、80年代の終わりころからは小説書いたり翻訳したりと書く方に比重が傾いてたんです。

— でも書くのも才能がないとなかなかできないですよね。

僕の場合、恵まれてたのは、もともと歌う人間だったということがあって、原稿を依頼してくれる人も、歌ってる人が書くんだと捉えてくれる人もいたから、僕がこういう音楽は絶対嫌いだろなというのは頼んだりしなかったんです。でもプロフェッショナルな音楽ライターというのを選択しちゃって、もう来る原稿は全部書かなきゃいけないでしょ。そして例えば日本の音楽について何か書くということになると、もう批判はできないんです。まあ褒めるといふか。そういうの日本の音楽ジャーナリズムの弱い部分があった。僕は書くことだけに専念してなかったから、そこからは免れていたような気がするところがあったんです。

— でもそれでやってこれたのはいいですね。嫌な仕事をいやいややってると体に毒を溜め込んでいくような気がするし。

一度も就職せずに給料もらうことなくずーっと生き続けてこれたというのはラッキーだったというか(笑)。人の命令で動いたり指図を受けるようなことから免れたのは。

— 一時期歌ってなかったのがまた歌い始めたきっかけは何かあったんですか？

80年代の前半というのは雑誌BRUTUSのフリーエディターみたいなことをやってたんです。その時は日本がバブルで、BRUTUSという雑誌も「とにかく贅沢をしる、ブランドは大事だ、お金を使え」みたいな、ものすごくバブルに乗ったような贅沢はステキだという特集をやるような雑誌で、もちろん雑誌そのものも売れたし勢いもあったから、取材費とか打ち合わせとか好きに経費使えばいいし、とにかく遊ば遊ばほどいい雑誌が作れるみたいな方針があって、僕自身それに浮かれてバビロンの中にはまっちゃんたりして、5、6年そういうのにどっぷり漬かってたんです。そういうときはもちろん歌うことなんて全然忘れていて、地味に歌ってる人たちとも交流が途絶えたりして、今思い返すとひどい裏切りの時代だったな

← 神戸・舞子のこずみつくにてライブ。ギターに書いてある言葉は：

一と思うんだけど、80年代後半になるとバブルもおかしくなってきた、僕自身はチャールズ・ブコウスキーの小説の翻訳にとりかかったりして、だんだん眼が醒めてきて(笑)、で90年代になって50才くらいのとき、翻訳とかしてるうちにすごく歌いたい気持ちが強まったんです。

10代20代のころは、歌イコール若い人の特権で、若いからやれるという思い込みがあったんだけど、自分が50くらいになったときに、年をとって中年になりじいさんになりかけのときに、いろんなことを体験し、気持ちが翻弄されたり悩みを抱えたり、どうしていいか不安になったりとか、ああ年をとっても歌にしようなことはあるし、そういうことを歌ったら面白いなーと気づいたんです。

日本語でフォークソングを歌うという自分たちで作詞作曲して思いを歌うというのは僕らが第一世代だったわけで、その世代がどんどん年をとって行って老年期に入っていくときに、そういう思いを自分たちでつづって歌にするのも、それまでになかったことで僕らが初めてできるような面白さ。まあ歌謡曲なんかでも決まり切ったような歌はあったけど、年老いていく自分自身を見つめていく歌というのがこれからどんどん書けるなど。そしてそれはすごく面白いことだな、刺激的なことだなと思ったんです。

その気持ちが僕は今も持続していて、こんどは60代になり70代になる時に初めているんなこと発見したりして、今まで体験したことのないような感情とか、まわりで仲間がどんどんいなくなっていく中でいるんなことを思ったりして、そういうのって歌になるんじゃないかなーと思っていて。

歌謡曲でも亡くなる人のことを歌ったりはしてるんだけど、僕らなりのフォークソングやロックから学んだやりかたでまだまだ新しい歌を作れるんじゃないかなという気持ちになってるんです。

まあ同じ世代の歌手たちの中でも、新しいことをやるっていう人と、時間が止まっていて20代の自分を60代になっても再現しているような人もいるし、逆に聴く人も時代が止まったかんで、あの頃はよかったねー懐かしいねー僕らみんな若かったんだねーと感傷に浸るだけの人もいて、そっちの方がたぶん多数派だと思うんですけど。でもそういうんじゃないで、今現在の自分と向き合ったり、それを突きつけてくるようなものがあるだろうし、それを僕は歌いたいし、聞きに来た人と同じように共有できたらいいと思うんですけど、そういうふうにする人は少ないからなかなか難しいですね。(笑)

—— ボブ・ディランがノーベル賞をとりましたね。五郎さんはディランの全詩集を訳さ



れてます(\*『ボブ・ディラン前詩集 1962-2001』ソフトバンククリエイティブ刊 2005)が、どういう経緯でやることになったんですか？

僕は特にボブ・ディランを夢中になって訳してたということはなかったんですが、1990年代の後半くらいからボブ・ディランのいろんなアルバムが出しなおされたことがあって、僕に訳してみないかという話しがレコード会社から来たんです。それまではボブ・ディランといえば片桐ユズルさんや、あるいは中山容さんが訳していて僕の出る幕はなかったんですけど、でもその時レコードにつける解説の対訳でやりはじめて、どんどん出し直されるボブ・ディランを全部やってたら、いつのまにかほとんど訳していたみたい(笑) ことになって、それで2005年くらいにアメリカで全詩集の原書が出て、それをソフトバンクが翻訳権をとって出すという時に、僕がほとんどの詩を訳していたということもあつたし、菅野ヘッケルさんという人が僕が訳したらどうかと言ってくれたので、やることになったんです。

—— ディランが文学賞をとったと聞いた時はびっくりしました。

そのとき、僕が訳した全詩集は絶版になってから5年くらいたってたので、全く手に入らなかったんです。もしそれが出ていたら、増刷して本屋さんにわーっと並んだかもしれないけど、そうするとボブ・ディランの文学賞イコール歌詞を読めばいいんだというふうに、言葉だけでディランの文学賞の評価が誤解されちゃう恐れがあったと思うんです。でも受賞の理由とかをよく読むと、ディランの歌詞だけに文学性を認めて与えられたんじゃないで、アメリカの伝統音楽の中に新しい表現を見つけ出したということから、ボブ・ディランが受賞しているから、それは歌そのものが文学であるというふうに認められていて、歌詞だけを取り出して、ボブ・ディランの言葉だけが文学だというんじゃないで、歌全部が文学だよというふうに評価された僕は理解しているんです。だから

らその時に言葉だけの本がなかった方がかえってよくて、一番いいのはボブ・ディランの歌そのものを聴いてもらうのがいいかなーと思ったんです。…それは負け惜しみもありますけど。(笑)

—— 1月に出した2枚組のアルバムにはたくさん曲が入ってますが、その中に社会的なテーマの曲もかなりありますね。

いま僕はまた60年代中頃に歌い始めた時とすごく近い気持ちがあって、改めて考えてみると同じことを思ってるし、歌で同じことをやりたいんだなというふうになってるんです。最初ピート・シーガーとかウディ・ガスリーを聞いて社会的なメッセージのあるプロテストするような歌をうたいたいと思ったのが、いま現在同じ気持ちがすごく強くなってらるんです。それは僕自身の歌に対する気持ちとかとらえ方ということもあるけど、時代がやっぱりそういう歌をうたわなきゃいけないとか歌ってもいいし、歌ったらみんなに共感してもらえる世の中だという実感がすごくあるんです。言い方を変えれば、そういう歌が必要な時代というのはひどい時代だっていう証拠でもあるんですけど。でも今の時代、そういうことをうたわなくて何をうたうんだという気持ちになってるのは確かです。その僕の感じ方に対して、歌って何の意味もないとか力にもならないとか世の中変わらないという人はもちろん昔もいっぱいいたし今もあるし。60年代に15,6でやってたときは、社会的な歌をうたったり街の地下街でみんなと一緒に声を上げたりして歌えば、もしかしてそれは世の中変わるという何か力になって具体的な働きをするだろうみたいな青臭いというか単純に思ってたところがあるんですよ。

それから50年たった今、同じような形で歌をうたっても、もちろん歌うことによってすぐに世の中変わらないかもしれないし、大きな動きを直接的には作り出さないかもしれないけれど、でも今のとんでもない時代の流れの中で歌うってことが、何らかの形でじわじわと広がりをを見せて、そういう中で歌の力というかが歌がなしえることってきつとあるんじゃないかと僕は信じていて、昔ほど単純にストレートに結びついてはいないんだけど、結果的には歌うということが世の中変わることに絶対結びつくなという見方をしているんです。それで今年1月にアルバムを出したときも、そういう歌が中心になったかなと思ってます。

—— 書いたものは頭に届くというか理性的に伝わるけれど、歌というのは声の波動に乗

せてハートに届くから人を揺さぶるような力があると思いますね。

僕はやり始めた時は頭でっかちだったんですよ。戦争反対という歌詞にメッセージを込めることが大事だと思ってたけど、今はもちろん歌詞も大切だけど、人の心を揺り動かしたり励ましたりする音楽の力もすごいんだなと。それは続けてくる中でようやく気づけたなと思ってます。

それに歌う中で僕はライブというか、目の前で歌いたいわけです。その場で声を聞いたりどんな顔してるかとかそういうので伝わると思うから、CDとかレコードっていうのは僕は好きじゃないんですよ。もちろん歌う人の中にはせっせとアルバムを発表する人もいますが、僕はそっちにエネルギーを注ぐよりはライブをたくさんやって5人10人でもその場で歌を聴いてもらって伝えていきたいと考える方だから、あんまりアルバム作りは熱心じゃないんです。

今回アルバム作る時には、スタジオで一つ一つ音を重ねていくようなやり方は全然する気はなかったから、ライブをやっているのをそのまま収めようと思ったんです。それで去年の7月にアルバム作るからということでライブをやったでしょ。そうすると緊張しちゃうわけです。(笑) これはアルバムにしないといけないと思うと、やっぱりふだんのようにはいかなくて硬くなっちゃいました。

—— アルバムにも入ってる「1台のリヤカーが立ち向かう」という曲はいつ頃つくったんですか？

あれは7、8年前に横須賀でリヤカーをひいて駅の前とかで歌ってた村松としひでさんという人がいて、僕よりも一回りくらい年下なんだけど、70年代のはじめに横須賀の反戦フォーク集會を主催して呼んでくれて知り合ったんです。そのあと彼も結婚したり子どもを作ったりして仕事しなきゃいけないと歌うのを止めてたんですが、自分の子どもが中学生くらいになった時に父親が何をしてるか子供達に見せたいということで、また一人で横須賀の街頭に立って歌ったり原子力空母が入ってくるのを阻止運動やってたりして、それでまた再会したんです。何十年かぶりに一緒にコンサートをやってたりして、でも彼はガンになって50才で亡くなっちゃったんです。で、彼の歌を作りたいなと思って作り始めたんだけど、彼のようにたった一人で自分の思いを社会に向けて意思表示しようというそういう人というのはもちろん彼だけじゃなくて日本中にいっぱいいるし世界中にいるし過去にもいっぱいいたし、これから先だってぜったい出てきて、まずは一人で立ち上がって声を出すという

ことが世の中変えていくんだなって強く思って、だから元々は村松さんの歌を作ろうと思ってはじめてんですけど、それが広がっていったアメリカの公民権運動のために闘った女性やパレスチナのガザで石を投げている子供達とかに。そして今ライブで歌う時はそのつど新しい歌詞を作っていて、今だと辺野古や高江で闘っている人たちのことを歌ったり、去年だと国会前で集まって声をあげたりしたことを歌にしたり。これからも歌い続ける中でそういう人たちのことを歌い込んでいきたいなと思ってます。(※インタビューの後のライブでこの歌をうたいました。https://youtu.be/kPmt5YLvJ3I)

—— これはほんとにメッセージソングというか勇気づける歌だと思います。

僕の中では、中学生の時にフォークソングに出会ってまねごとではじめて、40数年つづけてきて、ようやく自分の歌ができたなと。もちろんアメリカのフォークのメロディとかスタイルなんだけど、自分の歌ができたなと実感できたのがこの歌なんです。

—— アルバムタイトルは「どうぞ裸になって下さい」という歌のタイトルがそのまま使われていますが、これはどういう思いがあるんですか？

これはもともと村山槐多という画家で詩人の人が、自分の好きだったモデルの女性に、絵を描くから裸になってくださいという詩なんですけど、でもその裸になるということが、僕自身の表現するときの一番のキーワードというか一番大事なことだと思ってます。つまり自分自身に向けて、歌をうたうときは裸になって、自分の本当の思いを伝えることが一番大事だし、そのことに真剣に取り組まなきゃいけないって自分に言い聞かせる言葉です。ついつい絵でも歌でも文章でも、飾り立てようとかかっこつけようとかきれいにしようとか、どんどん何か着せていこうとしてしまうけど、本当の一番深い表現をしようとするなら裸になることが大事なんじゃないかなという思いがあって。これはラブソングだけど村山槐多の詩を僕なりに裸になって表現することの大切さと重ね合わせて歌っていて、それって僕の歌の姿勢だなと思ったからアルバムタイトルにしたし、ジャケットも僕の絵を使ったりしたんです。

—— このアルバムではいろんな人の詩をうたってますね。

自分で詩も曲も書くことを大事にする、オリジナルが一番だよっていうか、作詞作曲な人とかっていうふうにこだわる人もいるけど、僕はそういうよりは、すごくいい詩を

1月に出た2枚組アルバム  
「どうぞ裸になって下さい」  
全14曲 ¥3600 コモエスタ/コス  
モスレコーズ=Fax. 086-224-7742



ど、僕はそういうのよりは、すごくいい詩をみつけたらそれにメ3600口ディをつけて歌ってみたらどうだろうと思ったり、絵本を歌にしたり、また「真新しい名刺」という歌は、金素雲という人が関東大震災の直後に大阪でランチに遭おうとしたときのことを書いている短いエッセイがあって、それをぜんぶ歌詞にして歌ってるんです。なにかそこにあって出会ったものを題材にして歌にしたいという気持ちがあるので。

—— 安倍晋三の東京五輪招致スピーチをうたった歌「Sports for Tomorrow」も面白かったです。

1月にアルバムを出した時に、あれを入れて万が一クレームがつく可能性があるかなと思って安倍晋三という名前は入れなかったんだけどね。

—— 「福島はアンダーコントロール」だとが恥ずかしげもなく言ったのは誰か、すぐにはわかりませんよ。

でも超有名な人のCDじゃないから分らないだろうと思って入れて(笑)今のところぜんぜん相手にもされないからいいんですけど。

—— きっとほかのことで頭がいっぱいなんでしょうね。(笑)

中川五郎のオフィシャルサイト  
http://www.goronakagawa.com/  
\*ライブ情報などはこちらから